

## 林語堂の幽默

—— その一側面について ——

高 橋 基代枝

### 序

「幽默」(Humour)<sup>(1)</sup>は林語堂が晩年まで関心を示したテーマであり、かれは1936年に家族を伴って渡米するまでの間に中国文化界で2度の「幽默」提唱を行っている。最初のそれは米国、独国留学(1919-1923)終了後の1924年であり、魯迅、周作人等と共に『語絲』誌上で己がじし自説を呈していた時期である。2度目は、1932年創刊の雑誌『論語』に於いてである。この雑誌は林語堂自ら主編を務めるもので、当時政治的関わりの中で文学者の立場が分化していた状況にあって、その「幽默」提唱とともに独自性を発揮した。従来、林語堂の「幽默」については「政治的視点」から捉える余り「資産階級的」「保守的」といった評価が下される傾向にあった。だが、そのような視点に固執しては林語堂の「幽默」を一方向的に評価するに止まるのみで、その意義を十分に把握することは困難である。

さらに、1927年の国共分裂による国民革命の挫折を通じて、「革命」と「文学」という問題を抱えた文学者たちの、その後のあり方については既に論ぜられているが、林語堂についてはこれまで十分には触れられていない。

小論では、以上の点を踏まえ、林語堂が国共分裂以後どのような足跡をたどって「幽默」提唱に至ったのか、またその提唱が如何なる意義を持つものであったのかを考えてみたい。まずは、林語堂が武漢政府に参加するところから始める。

## 第1章 国共分裂以前

孫文亡きあと、1926年6月蒋介石は国民革命軍総司令に就任し、7月北伐に出発した。北伐による全国統一は孫文以来国民党の一貫した目標であった。広州を出発した国民革命軍は、長沙、武漢、九江、南昌などの主要都市を占領し、翌年3月には上海南京に進駐した。この北伐の過程で、国民政府の所在地は広州から武漢へ移ったが、この頃より武漢の国民政府側（以下武漢政府と記す）と蒋介石との間に対立が生じつつあった。その一方、革命実現に期待をかける文学者の中には自ら北伐に従軍したり、武漢政府の下、宣伝工作に従事するものもいた。郭沫若、茅盾、郁達夫がそうであったように、林語堂もまた例外ではなかった。

あの頃、わたしは国民革命に気持ちがいって、これから中国にも夜明けがやってくるのだと思い込んでいた。そこで、武漢の国民政府に身を投じてはたらいした。（「林語堂自伝三」・『逸経』第19期）

林語堂が漢口へ赴いたのは1927年3月のことであった。それまでは故郷にある厦門大学で文科主任と国学研究院総秘書を兼任していた。北伐開始直前に軍閥の弾圧を逃れ、北京から厦門にやって来たのだが、その時厦門大学に招き入れた北京大学の同僚の魯迅、沈兼士、孫伏園は大学の体質に閉口し<sup>(2)</sup>、すでにこの地を去っていた。最も長く留まっていた魯迅も、林語堂が漢口へ赴く2か月前に広州へ向かった。同僚が次々に厦門大学を去っていった後、林語堂も校長と意見が合わず、結局「これ以上、そこに身を置くことが出来なくなった。」（前掲・「林語堂自伝三」）という状況に追い込まれていた。一方、このような事件とは別に、北伐開始からの国民革命軍の快進撃は、林語堂の革命への期待を膨らませていた。

わたしも厦門大学を辞め、革命政府へ行って外交部長陳友仁の下ではたらいした。わたしは彼をずっと尊敬していた。彼はかつて英国と交渉して漢口の租界を回収したことがあった。（『八十自叙』第十章）

北伐軍が長江流域に進出すると、この地域に租界をもつ外国との衝突が必

至となったが、漢口、九江の英租界の回収に尽力したのが外交部長陳友仁であった。(兩租界は1927年2月公式に返還)

陳友仁は1878年、英領トリニダードで生まれ、英国で教育をうけた。民国革命後帰国、北京政府交通部顧問に就任するが、袁世凱の独裁に憤慨し辞職した。1914年には英文紙『北京ガゼット』の編集長となる。林語堂は上海の聖ジョーンズ大学在学中、この英文紙を愛読していたという(「辜鴻銘」・『人間世』第12期)。その後、陳友仁は孫文の側に投じ、1919年広東政府代表としてパリ講和会議に出席する。林太乙『林語堂伝』によれば林語堂が北京の『国民新報』英文部編輯に携わっていた時の同紙の記者が陳友仁であったという。また、林語堂は陳友仁を次のように評している。

英語力もさることながら、その思想と議論は人より一段抜きんでている。(前掲・「辜鴻銘」)

林語堂の陳にたいする尊敬の念は、『北京ガゼット』愛読に始まり『国民新報』英文部で知り合うあいだに強まっていったのではないだろうか。その上に、英租界回収における陳の功労は、林語堂の革命への志向を強めたにちがいない。後に、林語堂が武漢政府外交部秘書として陳の下ではたらいたのも、このような事情が関係しているのであろう。

「中国にも夜明けがやってくる」はずで、漢口行きを実現させた彼が武漢政府外交部秘書としてその任に当たったのは、皮肉にも「清党」という名目で断行された蒋介石による反共クーデターのわずか一月前であった。蒋介石はクーデターの後、武漢政府に対立して南京にいま一つの国民政府を樹立した(1927年4月18日)。ところが、武漢政府も急速に変質し、その反共的態度を明らかにした結果、第1次国共合作は崩壊した。こうした一連の事件は文学者に衝撃を与えたのである。

蒋介石はもはやわが国民革命軍の総司令ではない。蒋介石はごろつき、地まわり、土豪劣紳、貪官汚吏、売国軍閥、ありとあらゆる反動派——反革命勢力の中心の力である。

彼の総司令部は反革命の大本営、民衆を惨殺する大屠殺場にほかならない。<sup>(3)</sup>

これは郭沫若の「今日の蔣介石を見よ」(原題「請看今日之蔣介石」)の冒頭である。かれは蔣のクーデターの直前(3月31日)に、この檄文を南昌でかいた。その終わりのほうでは革命的同志に向けて「反蔣」に立ち上がるようにと叫んでいる。一方、郁達夫も公然と蔣介石一派を批判する「方向転換の途中で」(原題「在方向転換的途上」)という文章を発表している。郭、郁両氏の批判の焦点は、他でもなく国民革命が民衆から離反しつつあることにあった。しかし、これこそ国民革命の現実であった。

国共分裂の結果、武漢政府が崩壊すると林語堂は9月に上海へ向かったが、その時「革命家に嫌気がさしてしまった。」(『八十自叙』第十章)という。これは、その国民革命への希望とは裏腹に、革命家と称するものが、「革命」の名の下に、自らの利害得失を計っているということへの嫌悪を示すものといえよう。このように、他の文学者同様、林語堂も革命の挫折を経て上海へ向かった。ただ武漢政府という政治の場での経験から自己についても認識する。

当時、陳友仁の英語に感心して漢口の革命政府に参加し、外交部秘書となったが、4か月後(6か月後の誤りであろう一筆者)には政治から離れた。というのは自分は草食動物であって肉食動物ではなく、己を治めることには長けているが人を治めることは不得手であることを悟ったからだ。(『八十自叙』第一章)

因みに、林語堂は武漢政府に参加したあいだ、国民党の機関紙『中央日報』英文版の主編を務め、自ら謝冰瑩の『従軍日記』<sup>(4)</sup>を英訳し掲載している。また『中央副刊』にも数篇の文章をかいている。勿論これだけでは林語堂の武漢政府時代の全貌は掴めない。ただ本人の証言から「草食動物」である自分は「人を治める」政治の場に相応しくないと認識したことは分かる。<sup>(5)</sup> 林語堂のこのような性質は今後の活動に係わるものである。次の移動先上海では、活動の場を「政治」から「著述事業」に移し、それは生涯かわることはなかった。

以上述べてきたことは1927年3月から9月にかけてのことである。わずか半年の間に林語堂の環境は目まぐるしく変わっていった。それは国民革命を

軸にした変化であったといえる。ここでは林語堂の武漢政府参加から国共分裂を経て上海へ至るまでの道程を、大まかに確認する程度に止め、次章から、その後林語堂が如何なる方向へ進んで行ったのかを詳しく見ることにする。

## 第2章 国共分裂から雑誌『論語』創刊まで

清党以来、武漢政府を追われるなどした知識人たちは、その足場を租界上海に求めた。そのため、上海文化界は各人の体験に基づいて種々の方向へ展開していったといえる。第三期創造社と太陽社のメンバーによって提唱された「無産階級の世界観」に立つ「革命文学」もその一つである。この上海における「革命文学」隆盛の事情について「革命の昂揚によるものではなくて、革命の挫折が原因であります。」と実に皮肉な現実を指摘したのは魯迅であった。（「上海文芸の一瞥」竹内好編訳『魯迅評論集』岩波書店、1981年所収）

ところで、第三期創造社の郭沫若が武漢政府政治部秘書長として北伐に従軍したことは周知の如くである。武漢政府に参加したという点では林語堂も郭沫若も同じ方向へ向かっていた。にもかかわらず革命の挫折を経た後、両氏のあいだには共通性を見出しにくい。そもそも両氏が武漢政府に参加したのは国民革命を遂行させる一助となるためであった。では、両氏は国民革命をどう捉えていたか、その捉え方の違いから革命挫折後の歩み方の違いを考えてみる。

郭沫若は北伐に従軍する以前に「革命と文学」（1926年5月）という評論の中で次のようにいう。

およそ無産階級に同情ししかも浪漫主義に反抗するのが革命文学である。（中略）無産階級の理想は革命文学者によって目ざめさせられることを望み、無産階級の苦悶は革命文学者によってありのまま描き出されることを望んでいる。このようなものであってこそ、我々が現在求めている真の革命文学になるのだ。

これは郭沫若の文学観が、この頃より「第四階級の立場でものを言う文芸」

〔「文芸家の自覚」1926年5月〕へ移行していったことを示す。このように「無産階級に同情」するという意識をもった郭沫若は国民革命を如何に捉えたか。

わが国民革命の意義は経済面からいえば、同時に国際間の階級闘争である。(中略) わが中国の民衆は大部分無産階級の地位に落ちている。民衆に共感し、国民革命に共感する者は、根本的に帝国主義に反抗せずにいられない。軍閥、官僚、買弁、劣紳のごとき、民衆に共感せず、国民革命に共感しない者、かれらは結局は帝国主義と一体になってわれわれを圧迫するにちがいない(實際上すでにそこまで進んでいるのだ)。ならばわれわれの革命は、根本的にはやはり、無産階級を主体とする勢力の、かれら有産階級に対する闘争ではないか。

郭沫若は「革命と文学」の末尾で以上のように述べている<sup>6)</sup>。かれは中国内部の勢力を「無産階級」と「有産階級」に分け、その勢力間の「圧迫」と「反抗」を国民革命の意義と考えた。それが北伐従軍という実際行動の上に、また蒋介石に対する檄文の上に反映されている。郭沫若の考え方に従えば国民革命の挫折は「有産階級」が「無産階級」を圧迫したことによる。そのため革命挫折のあとにも圧迫者に対する闘争の意識は残ったといえる。

では林語堂は国民革命を如何に捉えていたか。

武漢政府崩壊後、上海へ移動した林語堂は蔡元培の勧めで中央研究院上海分院の英文編集長として迎えられ、また前後して上海へ移動してきた魯迅、郁達夫との交際を再開した。その一方で、上海文化界で先にも触れた「革命文学」の声が高まりつつある中、蒋介石は国共分裂以後一時中断していた北伐を再開した(1928年4月)。この北伐再開に林語堂は次のような反応を示している。

その後、再び革命が始まると、私もまた気持ちが傾いて夢を見ていた。だが、この度はそれ程長い夢ではなかった。丁度よいところで自然に目が覚めて、革命が成功した後はもう夢さえも見なくなった。(「新年的夢想—夢想的中国」)<sup>7)</sup>

「革命が成功した」とは1928年6月の北伐完了を指すことはいうまでもな

い。上掲の引用文は革命の挫折を経た林語堂が少なくとも北伐再開から完了までのあいだ夢を保持していたことを示すものであるが、それは一体どういうことか。実は上掲の引用文は以下に掲げる文に続くものである。

以前、私は確かに武漢の国民政府に身を投じ、汚職をしない、金を欲しがらない、人を騙さない、空論を説かない政府が今すぐにも実現しそうなのを目の当たりに見たのだが、今となってみれば、南柯の夢は所詮、南柯の夢なんだ。

これによれば林語堂にとって武漢政府は理想的政府であったようだ。革命が挫折しなければ北伐完了後、武漢政府による全国統一が実現したはずである。そして、それは林語堂が国民革命に見た夢と考えてよかろう。その夢は国共分裂によって烏有に帰したが、林語堂が北伐再開に一時夢を抱き得たのも、再びそれが実現されるのではないか、という期待があったからといえる。

ここで郭沫若について振り返ってみると、彼は国民革命を「無産階級を主体とする勢力の、かれら有産階級に対する闘争」と捉え、革命の過程或いは革命のあり方を問題とした。一方、林語堂は軍閥と帝国主義を打倒する革命戦争の結果として国民政府による全国統一を問題とした。両氏の違いとして革命を階級間の闘争とみるか否かということを挙げるのは誤りではないであろう。言うまでもなく、革命を階級間の闘争とみた郭沫若は、為に革命挫折後「階級的正義を正面におしだす」<sup>6)</sup> こととなった。さらに革命の時間軸のどこに視点があるかということも、その違いとして挙げられないか。筆者は、郭沫若は革命の過程を問題としたといったが、それにたいし林語堂は革命の結果をつねに問題とした。かれが「夢」という表現を多用するのも革命を希望的に捉えていたからであろう。そのため、林語堂に意識の変化が表れるのは「夢さえも見なくなった。」という北伐完了以後と考えられる。

では次に北伐完了以後の林語堂についてみていく。

上海で北伐完了（1928年6月）と訓政開始（同年8月）を見届けた林語堂は『翦拂集』と題する最初の文集を出版する（同年12月）。その序文の冒頭からは林語堂の沈潜した氣象が窺える。

私は過ぎ去りし日の熱烈さと若気による勇気をただしみじみと思うばかりだが、それは今の沈静やこの2年間に得た知識によって暈された心境とは明らかに正反対であるから、益々今の私自身の鈍感と頑迷が目立つのである。

そして、この様な状態に至った原因の一つには自己の年齢が若くないこと、一つには環境のことを挙げて次の様に続ける。

北伐が完了し、訓政が始まって、天下は確かに太平となった。そんな時、人はどうしても太平人の寂寞と悲哀を感ずるのだ。

『翦拂集』に収められた28篇は、林語堂が主に北京時代（1923年9月-1926年6月）に発表したものである。かれはこの北京時代に、所謂「語絲派」の一員として魯迅らと共に忌憚のない意見を発表した。この時期のことについては、自ら回顧して「時事政治について、口に任せて批評した」（前掲・「林語堂自伝三」といい、左派文学者胡風も、その著「林語堂論」<sup>9)</sup>のなかで林語堂を「北京政府の下に身を投じた学者に対する闘争」の陣営に属したとして、その「戦闘性」を認めている<sup>10)</sup>。序文中の「過ぎ去りし日の熱烈さと若気による勇気」とは、その様な林語堂の北京時代を象徴している。それと対照をなして現在の「太平人の寂寞と悲哀」がある。先に林語堂が沈潜した状態に至った原因の一つに環境、つまり「北伐が完了し、訓政が始まって、天下は確かに太平となった。」ことを挙げた。しかし、太平の世の中にあつて、寂寞と悲哀を感ずるとはどういう訳か。林語堂は前掲の引用文に続いて、北京の段祺瑞政府の下で繰り広げられた「天安門前の大会」「西長安街での市街戦」「北大第三院での追悼大会」「3・18事件」を回想したあと次のようにいう。

時代はもはや激烈な思想を受け入れるところが無くなったから、激烈な思想も次第に消滅するだろう。

ここで北伐完了後の政治情勢に目を転じてみたい。

蒋介石の国民党は北伐完了を以て一応中国の国家的統一を成し遂げ（地方の共産党政権は除く）、孫文の「建国大綱」により革命の第一段階である軍政期から訓政期の時期へ入った。この訓政期は「党の独裁を前提として、地



方自治体における大衆の民主主義的訓練を行うことを目指していた<sup>(11)</sup>が、実際は「党の独裁、ひいては蒋介石の独裁を正当化する」<sup>(12)</sup>こととなった。国民党の支配を示す例として、1928年10月公布の「訓政綱領実施規定」には必要により集会、結社、言論、出版の自由を制限することや大衆の政治参加の範囲を限定することが盛り込まれている<sup>(13)</sup>。

このように林語堂のいう「時代」とは、党の独裁を進めるため支配者側に不都合な思想言論、運動等に制限が加えられる時代であった。それ故、北伐完了によりもたらされた「太平」は林語堂にとって、強いられた「太平」であり、「寂寞と悲哀」を感じた訳は、以上のような政治的環境の変化によるものであった。そして「寂寞と悲哀」を感じつつも太平の世の現実を見つめて次のようにいう。

以前はあの様な勇気をもって、名流の「読書救国」論、「莫談国事」論に反対したが、今となつては良心に照らすと、同じ主張をしようとは思はない。(『翦拂集』序)<sup>(14)</sup>

林語堂はこの太平の世に見られる「沈静した態度」を「青年の拓落」と考えることにたいし、はっきりとそれを否定し、それは「拓落」ではなく「自衛の聡明さ」であるという。このような発言はかれの「この2年間に得た知識」に裏づけられたものである<sup>(15)</sup>。また『翦拂集』を編んだ意図についても、それは単に「太平の国民は寂寞を感ずる程、益々むかし戦乱時代だったころの銃声を追想したくなるのだ。」といった理由だけではない。その真意は、今や国民党に忠誠を尽くし立身出世を果たしたむかしの学者名流たちの遺影を保存することにあつた。この『翦拂集』は前掲の胡風の言葉をかりれば「北京政府の下に身を投じた学者に対する闘争」の作品である。その学者が革命成功を機に転身する姿をみた林語堂は、むかしのように「口に任せて批評」することはなかったが、学者たちの「布衣時代」を残すことでそれに替えたのである。

以上述べたことから、かつて林語堂が国民革命を夢として捉えていたようなところは窺えない。革命の成功によって世の中は一変することはなかったし、それを認識することによって、林語堂の意識がより現実を見つめよう

とする方向へ変化していった、と筆者は考える。

また、このような意識の下、林語堂自身の考える「革命文学」を次のように述べている。

私は革命文学には二つの意味しかないと考える。それは命懸けであらゆる在朝在野の暗黒、腐敗、無恥、虚偽、卑劣に反抗する文学か、実際に兵士の服を着て、兵士の靴を履き、兵士の食事を食らい、爆弾を持って反革命陣営の残塁に投げつけながら、夜は家畜の糞尿のにおいのなか、ろくに眠れず起き上がって、その出征途上を書き記した感想かのどちらかである。(『冰瑩従軍日記』序)

林語堂はこの章の冒頭で触れた第三期創造社、太陽社の提唱した「革命文学」及びそれをめぐる魯迅、茅盾との論争には無関係であったが、上掲の引用文の前で「“革命文学”は租界の洋樓に腰掛けてできるつくり話ではない。」と述べていることから当時上海で盛んになった「革命文学」を念頭においていたことは明らかである。さらに引用文から、林語堂は「革命」という實際運動に根ざさない「革命文学」を認めていないことも明らかである。それは魯迅が「革命を政治と戦闘の問題ととらえ」<sup>16)</sup>、「革命のほうこそ、文学に影響を及ぼすのだ」(「革命時代の文学」1927年6月)という考えに通ずるものではなかろうか。林語堂は、武漢政府参加から北伐完了までを自分が「夢を見ていた過程」であるという。それ以後のかれの意識の変化については以上みてきた如くである。その変化を林語堂自身は次のようにいう。

人生は所詮、理想主義から写実主義の路を歩むものだ。(『新年的夢想—夢想的中国』)

### 第3章 雑誌『論語』について

林語堂の主編に成る半月刊雑誌『論語』が上海美術刊行社より発行されたのは、1932年9月16日である<sup>17)</sup>。中国国内についてみると、『論語』創刊のほぼ1年前に満州事変が勃発し(1931年9月18日)、引き続き上海事変(1932年1月28日)が起こるなど、事態は騒然を極めていた。にもかかわら

ず国民党は日本の武力侵略に対して、「安内攘外」（まず国内の敵を一掃して後に、外国の侵略を防ぐ）を基本政策とし、共産党根拠地の囲剿作戦を行う一方、国民党の日本に対する無抵抗政策を批判して抗日を要求する言論出版活動には弾圧を加えることを専らとした。

このような混乱した社会情勢を反映して、満州事変勃発後、上海では大小の刊行物が雨後の筍の様に発行された（「子不語」・『論語』創刊号）。そのうちの一つである『論語』は如何なる雑誌であったか。『論語』発刊の経緯については創刊号の「縁起」に述べられているが、まずはその冒頭をみよう。

論語社同人は<sup>(18)</sup>、世道日に衰え人心日に危うくなるに鑑みて、悲天憫人の念を抱いた。そこで一刊行物を起こし些か愚見を開陳し、以て社会国家に寄与する。

この文章には雑誌刊行の理由と目的が端的に述べられているが、その反面、具体性に欠けるため雑誌の性格が捉えにくい。続く文章では、同人の面々はこれまでに何か事業を打ち立てようと試みたが失敗したこと、その後、何もしない日々が続いたが雑誌刊行の目処がたって皆がそれに向けて動きだしたことが記されている。この「雑誌刊行の目処」とは要するに雑誌刊行に当たって必要な資金の都合がついたということである。「縁起」によると同人の一人が岳母に資金援助を請うたが容れられなかったため、雑誌刊行の話は一時御破算になったようであるが、その岳母が亡くなったことにより『論語』刊行は実現したという次第である。さて、「縁起」は『論語』刊行に至るまでの経緯を述べた後、次の様なエピソードを載せている。大略は、雑誌刊行の知らせを受けた友人が雑誌では如何なる主義を宣伝し、如何なる主張を持つものかを詰問してきたこと、また別の友人は資金の出所は孫か胡か汪公か蔣公か<sup>(19)</sup>とこれもまた執拗に問うてきたこと、である。『論語』の側ではそれに対して宣伝する主義主張はないこと、資金は富貴な同人や読者の講読料から調達すると答えている。この「縁起」に伝えられるエピソードは一体何を意味するかといえ、『論語』という雑誌の性格を示す一つの要素だと考えられよう。『論語』の表紙裏には毎号「論語社同人戒條」が十箇条掲げら

れていたが、その中の

四、人から金銭を頂かない、他人のためにもものをいわない（如何なる方面のためにも補助金付きの宣伝はしない、但し、為すべき宣伝はする、場合によっては宣伝にならぬこともあるだろう）。

これはエピソードの内容を条文化した恰好になっている。では、このように『論語』が何者にも拠らず独立した環境を保持しようと努めた理由は何であったのだろうか。林語堂は次のように述べている。

現在の論壇にはすぐれた声あまり起こらない。文学評論は政治の従属物と化し、文人のグループは共産主義と国民党との政治的地盤に依って分裂している。之は（中略）あらゆる形態の政治的確執をもたらし、文学評論から健全なる観察力と遠大なる視野とを奪い去るに至るであろう。政治の渦中に投じた文筆は、党派の紀律と党派の政策に服従しなければならぬ。そこでは個人は最早個人であり得ず、何を考え何を語るかを彼に命令する党派の宣伝活動の熱烈なる使徒と化してしまうのである。（安藤次郎，河合徹訳『支那に於ける言論の発達』生活社刊1939年，221頁）<sup>(20)</sup>

当時、すべての文人や文学評論が共産党か国民党のいずれかに従属していたわけではないが、蒋介石のクーデター以来、顕在化してきた左右の政治的対立が文化界を巻き込んでいく結果となったことは確かである。周知の如く、1930年3月に中国共産党の指導により上海に左翼作家連盟が組織された。一方、国民党も「民族主義文芸運動宣言」（1930年6月）を出して文学方面で運動を展開していく。そのような中で、林語堂にとっての問題は、共産党か国民党かではなく、個人として発言ができるか否かにあった。先に引用した「論語社同人戒條」の八條には「まじめな私見だけを語る」ことも掲げられており、『論語』はそれを実現する場であったといえよう。

では、次に『論語』という誌名について少しく見てみたい。この誌名が孔子の言行録である『論語』と同名であることは言うまでもないが、『論語』創刊号の「編集後記」によると『論語』という誌名は「論」と「語」という字を合わせて成ったものである。「論」は「論到国家大事，男女私情」「品論

人物」「評論新著」の「論」であり、「語」は「語ること（原文＝説話）」の意味で「閑談」を指す。林語堂は、『論語』刊行の意義を「我は天下健談の友を一室に集め、半月に一度、天下をして密かに我が縦談を聞かしむ」（「與陶亢徳書」・『論語』第28期）ことにあるという。つまり彼は『論語』という雑誌を健談の友が縦談する一室の空間に想定し、そこで「論」ぜられたり「語」られることを天下の人々に聞かせようというのである。言うまでもなく実際は「聞かせる」のではなく「読ませる」のである。その論ずる対象は「国家大事」「男女私情」「人物」「新著」と多彩であり、「閑談」「縦談」という如く語る内容も自由である。当時この誌名が原因して、林語堂等は孔子になろうとしているというものがいたようであるが（「編集後記」・『論語』第三期）、林語堂はそれに対して「聖人を冒瀆する気はない」といい、次のように説明している。

『論語』は『評論のことば』を文語にしたにすぎず、平凡で珍しくもない、皆さんその原義に注意して頂きたい。思想について言えば、我々は儒家仁義の談には反対であり、韓非の法治にはほぼ近いので、世間の人々が我々を新儒と見なすのは尚更心外である。但し、孔子自身の人格の偉大さは、我々ははっきり認めるものである。その上『吾は点に与せん』<sup>(21)</sup>『前言はこれに戯れしのみ』<sup>(22)</sup>『吾れ豈に匏瓜ならんや、焉んぞ能く繋りて食らわれざらん？』<sup>(23)</sup>といたる所で、孔子が燕居して門人と幽默たつぷりに談笑する様子も窺われるが、それは読者の皆さんが論語をお読みくださればよろしい。この一点において、孔子は我々と同調するものである。

竹内好氏は『論語』という誌名について「林語堂も新時代の一人であるから、礼教擁護のために『論語』を持ち出すはずがない。」（「魯迅と林語堂」・『朝日評論』1947年11月号）と述べているが、そのことは上掲の引用文からも明らかである。むしろ林語堂等の『論語』は「儒教仁義」を否定し「韓非」に賛同している。その思想的立場を反映した林語堂の「半部韓非治天下」（『論語』第三期）、「臉與法治」（『論語』第七期）、「又来憲法」（『論語』第八期）、「談言論自由」（『論語』第十三期）はいずれも国民党統治下で無視

されている人権や言論自由の問題を論じており、それは林語堂が「中国民権保証同盟」<sup>(24)</sup>（1932年12月上海に成立）に参加したことにつながるものである。また、林語堂等の『論語』は「儒教仁義」は否定しても孔子が「燕居して門人と幽默たっぷりに談笑する」点には同調するという。これは次のような林語堂の考えに基づいているのであろう。

ただ孔子という生き活きた人を、生き活きた人から考古家に変え考古家から聖人に変えたのは、すべて漢朝の経学家の過ちであったと私は思う。今日の我々の職務はすなはち孔子の真面目を取り戻し、孔子を人にさせることのみである。（「給玄同的信」・『語絲』第23期）

これは1925年の発言である。その十年前に、陳独秀によって創刊された『新青年』（当初は『青年雑誌』）は孔子を含めた儒教、旧文化を否定する新文化運動を推進した。この運動の思想と林語堂のそれとの違いはかれも儒教否定者ではあるが、孔子自身は否定していないという点にある。むしろ、林語堂は聖人としての孔子ではなく人間としての孔子を顕彰する。林語堂の唯一の戯曲「子見南子」はそのような視点から孔子を描いたものである<sup>(25)</sup>。以上眺めてきたように、『論語』という誌名は、ややもすれば竹内氏のいう「礼経擁護」の印象を与え兼ねないが、主編者である林語堂の思想的立場はそのような印象とは全く相容れないものであった。

#### 第4章 「幽默」提唱の一側面

林語堂が「幽默」を論じたものには、1924年『晨报副刊』に発表した2篇<sup>(26)</sup>の外、『論語』第33期と第35期に分けて掲載された「論幽默」がある。この論文は上中下篇からなり、林語堂の物するなかでは比較的長めであるといえる。ジョージ・メレデイスの『喜劇論』<sup>(27)</sup>を踏まえ、林語堂自らその出来ばえの良さを自負する（『八十自叙』第九章）この論文は、『論語』が創刊されてから略二年後の1934年に発表された。他方「論幽默」に比して簡潔ではあるが、「幽默文は必ず写実主義である。」（「我們的態度」・『論語』第三期）という象徴的な一文がある。これもまた、林語堂の幽默感を端的に示すもの

として重要である。なぜなら、この一文は、林語堂が『論語』において「幽默」を提唱した際におこった批判、例えば、「幽默文」は「遊戯文」「新笑林広記」であるとか、「青年に軽浮叫囂の風を啓く」「取るに足らないもの」等にたいしての、言はば切り返しなのであるが（前掲・「我們的態度」）、「幽默文」を「遊戯文」「新笑林広記」と誤解され、それをこの一文で正すところをみると林語堂の念頭にある問題を率直に表現した結果と考えられるからである。また別の例を挙げてみよう。

本刊の提唱する幽默が先人の遊戯文と異なるところとは、遊戯文では必ず道化の顔をして荒唐な話を専らとするが、幽默は実話を専らとする、（中略）論語が最も人に深く入ることができる理由は、論語は一句一句が真理であり一句一句が実話だから。（「答平凡書」・『我的話』所収）  
論語で幽默を提唱したのもただ幽默を提唱したに過ぎない、（中略）せいぜい一大国の中に、各種役人式の話をする雑誌のほかに、一つだけ実話をする雑誌が存在してほしいと思うだけだ（「今文八弊（中）」・『人間世』第24期）

以上の例では「荒唐な話」「役人式の話」に「実話」である「幽默」が対置されている。これらの例と前掲の一文には表現上の違いはあるけれども、「幽默」と「実」という関係を容易に認めることはできる。

では、何故、林語堂は「幽默」と「実」という関係を導き出す必要があったのか。前掲の一文が載る『論語』第三期の「我們的態度」の中で重要と思われる箇所を取り上げよう。

林語堂は先ず「中国ではどの刊行物を取り上げても正当高尚な理論がある」が、それらは「小学生のころからの作文教育」と、机上の学問を弄する学者が「主義という名詞を乱用」しているため、空論に陥り、独特の観察力が失われていると指摘したあと、政客軍人の発する宣言や通電も「道理に適い、読んで調子がよい」にもかかわらず、上海一市の改善も儘ならない、そのような文章による経世が「中国の恥辱」を永遠に留め、「日本人」から「文字の国」と譏られるのだという。この時、すでに日本の傀儡国家としての「満州国」は成立している。林語堂が「日本人」による譏りに触れているのはそ

うした母国の危機を意識してのものであろうし、併せてその危機感は、文章国家である母国の伝統にも由来していることがわかる。

以上のような警告は『論語』創刊前から発せられている。林語堂は「論現代批評的職務」（1930年1月於環球中国学生会）と題する講演の中で、「思想は衰退し文章は隆盛する」現代の中国を以下のような例を挙げて示している。

武人というのは挙兵するのに必ず先ず「主張和平」の通電を發し、下の者が反抗するのに必ず先ず「擁護中央」を宣言し、上の者が兵を濫用するのに必ず先ず裁兵會議を開く。（中略）明らかにアヘンを公売する場合でも必ずアヘン禁止募金という都合のいい名詞を考え出し、（中略）政府は民権を取り消し、言論を圧迫しても必ず大いに民権主義を唱えるのである。

このように、林語堂は、文人のみならず武人も一般社会においても文章を作ることに時間と精神を浪費する様を、「儒教正名の遺毒にあたっている」という。本来、儒教の「正名」とは「名」によって「実」を規定することであって、その目的は「名」と「実」とを一致させることにある。ところが現代の「正名」は「名」と「実」の一致どころか、「名」を冠することによって「実」の不正を正当化したり隠蔽しているのである。「目を見張って現実を叙述する」（前掲・「我們的態度」）という雑誌『論語』の在り方は一見平凡ではあるが、実際は「正名」の毒にあたった世の中であって、「実」を追求しようとする態度に他ならない。

ところで、林語堂が儒教の遺産の中で、「正名」と同様に「毒」視するものに「道統」の觀念がある。周知の如く、「道統」とは「堯舜湯文王孔子孟子」と繼承される「先王の道」の伝統である。孟子以来絶えたこの伝統を繼承しようとしたのは宋代の程伊川であり、朱子に至って「道統」の觀念は確立した。「宋学」が「道学」と称せられるのはこのような理由による。では、林語堂はこの「道統」ということばをどのような文脈の中で使用しているだろうか。以下に示そう。

中国思想の隆盛は当然周秦が最も盛んであったが、武帝が儒を尊び百



家を罷黜して以来、思想統一の局面を作り、中国人の思想家は伝統的権威と政治勢力に圧迫され、ついに生気を失って、甚だしく枯燥沈悶し、如何なる場合にも孔孟荀董の罨から逃げ出せなかった。時は今日に至り、儒家の道統はもうすでに世界の潮流に打倒され……（「論現代批評的職務」・『大荒集』所収）

林語堂は「道統」を漢代以来連綿と続いた思想統一の局面において捉えている。特に「道統」を強調した「宋学」に見られるところの欲望を否定したりゴリズムは文学の上にも反映され、林語堂はそれを「自然人」が抑圧された文学として指摘した。このような環境の中では「道德仁義治国平天下の道理」を講ずるだけの荘嚴な文学が正統なものとして位置づけられるが、一方で抑圧された「自然人」がその捌け口を求めたような「妖異猥褻な話」も存在する<sup>(28)</sup>。林語堂は、こうした「儒教の道統」、延いては「思想統一」が文学に及ぼす影響を問題のしたのである。その意味において「儒教正名」も今日に至るまでその禍根を残した。

さて、これまで眺めてきたのは過去の歴史における「道統」であった。しかし、林語堂は自己の生きる時代においても、「道統」という観念が存在することを認めている。

如何せん二千年の纏足に慣れた足は、その上知らぬ間に道統という二字をその脳裏に留め、排除しても排除しきれず、切り取ってもすっかり切り取ることはできないでいる。（中略）旧道統を打倒しても、また新道統に寄り掛かり、今日の左右両派の思想には、いづれも朕はすなはち国家であるという意があり、人の足を再びぐるぐる巻きにしなければ気が済まない、そこで所謂一道同風も一道同脚というやつに過ぎないということになる。（「説大足」・『人間世』第13期）

「二千年の纏足に慣れた足」とは「中国人の思想」を指す。言い換えれば漢代以来の儒教国教化が「中国人の思想」を纏足の状態にしてしまったのである。しかし、今日において、儒教というものが制度としてその拘束力を失った後、残ったものは観念としての「道統」であった。林語堂はそれを「欽定観念」という。1927年の国共分裂とその後の情勢は、国民党も共産党も自

らが「革命」の主導者であると自認し、従って双方とも相手を「反革命」と規定するという左右両派の対立であった。左派も右派も自分の思想を正統として、それ以外のものは圧迫し排除するという図式は「儒家の道統」にすべてを圧迫してきた過去の歴史を繰り返していると林語堂は考えたのである。第3章でふれたように、林語堂は言はば両政党の「新道統」に寄り掛からない雑誌『論語』を刊行し、そこで「幽默」を提唱した。かれはその根底にあるものを次のようにいう。

東隣の家はプロレタリアで西隣の家はファッショだけれど、おれはこんな代物を気に入らない、必ずなにか主義を言えというなら、おれは人間でありたいとしか言えない。（「有不為齋叢書序」・『論語』第48期）

先述したように、林語堂は「自然人」の抑圧という視点から中国文学の欠陥を指摘したが、この「人間」も「新道統」の抑圧をはねのけたところに存在する。従って、林語堂の提唱した「幽默」もそこに位置する。中国の思想史は、表面上儒教を正統としながらも、実際のところ、それに反発する「道家思想」（老荘思想）があり、人間はそこに活路を求めた。故に林語堂がその提唱した「幽默」の系譜を「莊生」に求めても不思議はなからう。

## 結び

以上、国民革命を出発点として林語堂の足跡をたどりながら、その「幽默」提唱を考えてきた。国共合作が崩壊し、蒋介石を中心とする国民党の全国統一は、林語堂にとって理想の崩壊にも等しかったといえる。そこからかれは「理想主義」から「写実主義」という意識の変化を示した。この変化は1930年代に入って提唱した「幽默」の写実性を強調した点に現れている。また、林語堂は国共分裂後に現出してきた左右の政治的対立及び文学界の対立の中に、宋学で強調された「道統」の観念を発見した。そのような左右の「道統」に対する林語堂の「幽默」は言わば「儒家」に対する「道家」として捉えることができよう。

ところで、林語堂は儒教の「正名」や「道統」を過去のものではなく同時

代に存在するものとして提起している。これには、現在起こっている事象を過去の歴史との連続性において捉えようとする考え方が根底にあるのではない。過去の歴史の中から「幽默」を見出すところにもその態度が窺われる。この問題については今後検討する必要がある。

### 【注】

- (1) 「幽默」は“Humour”の音訳語である。林語堂は『論語』創刊号「答青崖論幽默譯名」の中で「“Humour”は本来翻訳できないので、音訳するしかない」と述べている。
- (2) 魯迅の往復書簡集『兩地書』（第二集厦門—広州）は当時の厦門大学の様子を伝える資料である。
- (3) この引用は小野忍他訳『郭沫若自伝4』（平凡社・1971年）に拠った。
- (4) この北伐の記録ははじめ『中央日報』（1927年3月22日創刊—同年9月15日停刊）に掲載された。後に、この作品を単行本にまとめることを勧めたのは林語堂であり自ら序文を書いている。
- (5) 『逸経』第19期「林語堂自伝三」の中には「私は永久に行動の人にはなれない。行動の意義は団体のなかで働くことにあるが、私は仲間にたいする尊敬の気持ちが強すぎて彼らにこうしろああしろと指図できないからだ。」という記述もあり林語堂の性質を窺うことができる。
- (6) 丸山昇氏は郭沫若の「革命と文学」末尾を引いて、かれが「社会主義・無産階級の立場を志向しているということ」に先ず注目しそのことと国民革命との関係については「帝国主義打倒・社会主義への闘いを、国民革命を出発点とし、それとの連続において、その必然的な広がりとしてとらえようとする」と指摘している（『魯迅と革命文学』紀伊國屋書店・1944年、85-86頁）。また尾崎徳司氏は郭沫若の北伐の記録『北伐途次』を引いて「郭沫若は、北伐の本質を農民の解放においている。」と指摘している（『中国新文学運動史』法政大学出版局・1957年、230頁）。
- (7) 引用文の初出は『東方雑誌』第30巻1号（1933年1月1日）であるが『林語堂選集（国事）』（読書出版者、1969年）所収のものに拠った。
- (8) 尾上兼英『魯迅私論』（汲古書院・1988年、188頁）
- (9) 1935年1月1日、雑誌『文学』に発表。引用文は『現代支那文学全集』文芸論集（東成社、昭和15年）の猪俣庄八氏の翻訳に拠った。
- (10) 郁達夫も『中国新文学体系』第七集の導言の中で「翦拂集時代の真率な勇敢さは確かに知識人の本色である。」という。
- (11) 山田辰雄『中国国民党左派の研究』（慶応通信・1980年、5頁）

- (12) 同上
- (13) この後、国民党宣伝部は「宣伝品審査条例」を公布（1929年2月今村与志雄氏の「中国における出版と検閲についてのノート」（『東洋文化』44）によれば、この条例の第5条「反動宣伝品」の規定に「共産主義及び階級闘争を宣伝する物」「国家主義、無政府主義及びその他の主義を宣伝して本党（国民党）の主義・政綱・政策及び決議案を攻撃する物」等が挙げられている。
- (14) 1925年、上海で起こった学生の5・30運動にたいし「現代評論」派は「勿談政治」「閉門読書」「読書救国」を主張したが、林語堂は「およそ健全な国民には政治を語るという天職がある。」（「謬論的謬論」・『語絲』第25期）という立場からその主張に反論した。
- (15) 林語堂は「この2年間に得た知識」から3・18事件で射殺された48名という青年の数を驚く程ではないという。つまり「この2年間」に行われた民衆の大虐殺はかれにとって一つの教訓となっている。
- (16) 尾上兼英『魯迅私論』（汲古書院・1988年、209頁）
- (17) 林語堂が『論語』の主編を務めたのは一年余りの期間で、1933年11月1日の第28期からは陶亢徳に替わっている。陶亢徳は1908年浙江省紹興に生まれ、林語堂とともに『人間世』『宇宙風』の編集にも携わった人物である。
- (18) 『論語』第28期の「與陶亢徳書」によると「所謂『社』とは全増嘏、潘光旦、李青崖、邵洵美、章克標諸先生が共同で賛助するという意味である。」とある。
- (19) 孫、胡、汪公、蔣公は各々国民党の要人である孫科、胡漢民、汪精衛、蔣介石を指すものと思われる。
- (20) 原題“A History of the Press and Public Opinion in China”（The University of Chicago Press.Kelly & Walsh Ltd.1936）
- (21) 『論語』先進篇
- (22) 『論語』陽貨篇
- (23) 同上
- (24) この同盟は汎太平洋労働組合書記局書記のニューランとその夫人が上海で国民党に逮捕、南京に投獄された事件（1931年6月）をきっかけに宋慶齡、蔡元培、楊杏仏等によって組織された。林語堂の自伝『八十自叙』第十章にはこの事件やその後楊杏仏が国民党特務に暗殺された事件についても触れている。
- (25) 「子見南子」という戯曲が人間としての孔子を描いていることについては竹内好氏が前掲の「魯迅と林語堂」の中で、尾崎和子氏が「林語堂の『子見南子』に見る南子像」（『野草』42号、1988年8月）の中で既に指摘している。この戯曲は1928年11月30日、魯迅主編の『奔流』第一卷第六号に発表された。ところがその翌年6月8日、山東省立第二師範学校で上演されると、その内

容が孔子を侮辱するとして校長宋還吾は孔氏族人から訴えられるという事件に発展する。校長宋還吾の答辯書によれば学校側がこの劇を上演した理由は「観衆に礼教と芸術が衝突した場合、芸術の中に真の意義を認めることを明らかにさせることにあった。」という。林語堂の描く孔子像とともに山東省の曲阜にある学校で「子見南子」が上演されたことは興味深い事実である。

- (26) 「徴譯散文并提倡『幽默』」(5月23日)と「幽默雜話」(6月9日)の2篇
- (27) 英国の詩人及び小説家 George Meredith (1828-1909) は1877年にロンドン学士会館に於いて「喜劇の觀念と喜劇的精神の効用」(The Idea of Comedy and the Uses of the Comic Spirit)と題する講演を行った。「喜劇論」(Essay on Comedy)はこの講演の内容に加筆したものである。
- (28) 林語堂のこの見解は【注】(26)の前者の資料に拠る。